

再び農業に期待する

— 人間性の恢復 —

富山県農村医学研究会 越山健二

過去3、40年の短い間に、私達の生活は、全く変化しました。農業も、農家も、農村も、大変な変化です。近代の科学技術の進歩は、高度の経済発展をもたらし、豊かな物質文明の中で、衣、食、住、が満たされ、医療面や福祉面でも、一応、施策が行き届き、満足な生活を享受しています。日本はいま、長寿高齢社会が問題となり、今後ますます深刻となり、高齢者の世代層も70才代層から80才代層へと、老化が進み、日常生活動作にも、介助や介護を要する老人の増加が予想されます。少産少死の人口構成、核家族、共稼等は、その養護機能を甚だしく弱めます。老人世帯や、一人暮らし、ねたきりなど、孤独で淋しく、身心の機能の低下をなげきながら、空しく過ごす老人が増えています。そんな中で、農家に生まれ農業を営み、たとえ第二種兼業農業であっても、太陽に親しみ、天地を友とした老後の生活がある事は、めぐまれた人たちであり、農業にとって、特権のような気がします。私達の祖先は、農林業を生業として生命を産み、生命を育てる事を日々の仕事として、その中で自然の恩恵に感謝し、自然を愛し、報恩の思いの中で老人をうやまい、人間性を育て、美しい文化を造りあげてきました。冠

婚葬祭をはじめ災害や病気、出産、新築など村十部といわれる業に相互に扶助し、連帯と協力の中で家庭や地域を守ってきたのです。

今日の豊かな物質文明は、簡便、便利で快適な暮らしをもたらしましたが、反面、家庭や地域を一変させ、一家団楽はなく、報恩、感謝、思いやりの気風も衰弱し、人間性の喪失が目立ってきたのです。

あらゆる生物にとって、死はさけられませんが、すべては、やがて通る道です。多くの高齢者の意識は家族と共に住み、家族の中で死を迎えたいと願っています。

昨年私達農村医学研究会が行った過去6年の死亡診断書調査によれば、死亡の場所は次第に病院などの施設に移行し、自宅で死んだ人は、80才以上の超高齢者で、農家、農村に多い結果でした。農村地区は今日尚、世代家族が多く、介護が可能で伝統的な気風が生きづいていると感ぜられるのです。

著者は本誌16号（昭和60年3月）で農業は生命産業であると述べた。今日国をあげて「ふる里づくり」が提唱されています。ふるさとの伝統文化を評価し、生命を生み、生命を育てる農業の中から失われんとする人間性の恢復を期待したいのです。